



特集

# 自然と共に生きる農業

vol.88

## 守輝人

— 有機農業 澤村 輝彦 —

### 自然を守る農業に

不知火町を中心とした5町に及ぶ広大な土地で、農業を営む澤村輝彦さん。最盛期は1日6トもの収穫量を誇るトマト農家だ。その全てが農薬や化学肥料を使わず、自然の力で作られる。澤村さんは農業大学卒業後、父親の下で漁業や農業を学んでいたとき、水俣の人々と出会った。「水俣病自体は耳にしていたけど、その苦悩や一生取り戻せない体という現実を知り、自然を守る農業にしなければと

感じました。」と決心した。その後、30歳で全ての農地を有機農業に転換。平成10年には、有機栽培で自立できる農業を目指し、「肥後あゆみの会」を結成した。自然災害や生産の難しさから、数年は苦しい経営状態だったものの、土壌づくりに向けて、肥料を自社生産。独自の有機栽培技術を確立させた。「スプーン1杯の土の中には1億ほどの微生物がいて、バランスの取れた栄養を与えて活性化。有機の力で植物の免疫力を高めます。植物も人間と同じ。

人間が食べられる天然のものしか使いません。米ぬかに小魚やカキの殻、エビやカニ、昆布、そして菜種油を絞ったかすなどを発酵させて肥しにします。口に入れるものと一緒なんです。」

### 思いが自然の恵みを届ける

現在は、産山村にも拠点を置く。年間を通して安定して生産できる体制を整え、関東や関西などの都心域に出荷する。「これだけやっても終わりが無い。何度も失敗していますが、難しいから面白いんです。」

宇城地域の生産を担う息子の光大さんは「父は夢への思いが強い。言葉には人を動かす力がある。」と憧れつつも、独自のやり方を模索し、偉大な背中を追う。有機は通常生産より多少値は張るが、その味を楽しみにするファンも多い。澤村さんはそんな有機の魅力を地域の人たちにも知ってほしいと、集落の畑を借りて、地域の人たちが楽しめる農場も作っている。

100年後の子どもたちに安心なものを届けたい。大自然に感謝して恵みを届けていく。



1 海藻やクレソンなど独自の配合で作った有機の液体肥料 2 収穫時期が終わると地元子ども会に収穫体験を提供 3 平成27年には「有機JAS食品加工所」の認定を受けた加工場を設置し、ジュースや

ビューレなどを製造する 4 産山村にあるトマト農場 5 今年は不知火町の遊休農地にヒマワリを植えた 6 真剣なまなざしでトマトを収穫する澤村さん 都心に出荷するため色付き始めた頃に摘み取る

澤村 輝彦 Sawamura Teruhiko

昭和35年不知火町生まれ、在住。同55年農業大学卒業後、就農。平成2年に有機農業に転換し、トマトや米、露地野菜を生産する。熊本県有機農業研究会に所属し、同10年には有機農業グループ「肥後あゆみの会」を結成。令和4年には県の農業コンクール地域農力部門で最優秀賞を受賞した。

# 一億の生き物が 生み出す 有機の結晶